

明・景泰帝の諡号「戾」について

滝野 邦雄

はじめに

景泰帝¹⁾は、兄の英宗の長子（後の憲宗成化帝）を皇太子としたうえで、帝位につく。英宗が土木堡で瓦剌^{オイラート}の捕虜になり、そのまま連行されていったためである。そして、勢いに乗じて北京にきた瓦剌^{ヤセン}の也先から北京を守り抜く。即位してしばらくすると英宗の長子の皇太子を廃し自分の子を新しい皇太子に立てる。しかし、すぐにその新しい皇太子は亡くなる（詳しくは拙稿「明・景泰帝の諡号について」(1)～(4) 参照：『経済理論』367号・369号・373号・374号)。その後、景泰帝は、皇太子を定めないままに、いわゆる奪門の変がおこり、帝位を追われ、亡くなってしまう。

亡くなると兄の英宗によって帝号は廃されて「戾」と諡される。そして、景泰帝によっていちは廃嫡された英宗の皇太子（憲宗成化帝）が即位すると、帝位だけは認められ「恭仁康定景皇帝」と諡される。南明政権は、「符天建道恭仁康定隆文布武顯德崇孝景皇帝」と諡し、「代宗」という廟号を贈る。清政権では、憲宗成化帝の贈った「恭仁康定景皇帝」を用いる。

つまり、景泰帝の諡号・廟号はつぎのようになる。

英宗による	:	戾（諡号）	廟号なし
憲宗成化帝による	:	恭仁康定景皇帝（諡号）	廟号なし
南明政権	:	符天建道恭仁康定隆文布武顯德崇孝景皇帝（諡号）	代宗（廟号）
清政権	:	恭仁康定景皇帝（諡号）	廟号なし

拙稿では、何度か変更された諡号のうち、英宗によって決められた「戾」という諡号について検討を行ないたい。そのため、まず英宗が帝位に復帰してから「戾」に決定した経緯を見て、続いて「戾」という諡の持つ意味を考えてみるつもりである。

1) 景泰帝の呼び方は、史料によっては憲宗成化帝の贈った「恭仁康定景皇帝」から全体を統べる本来の諡（拙稿「建文帝の諡号について（1）」（『経済理論』第355号）の注（1）参照）の「景」字を用いて「景帝」と呼ぶものもあり、南明政権の贈った廟号の「代宗」を用いるものもある。拙稿では、年號の「景泰」によって「景泰帝」と呼ぶことにする。また、英宗については、最初の年號が「正統」で、復辟後は「天順」なので、廟号の「英宗」で呼ぶ。

(1)

景泰八年（天順元年）正月十六日夜、いわゆる奪門の変がおこり、幽閉状態にあった英宗は帝位に復帰する。そして、二十一日に、「景泰」から「天順」に改元する。

〔天順元年〕丙戌（二十一日）、復位するを以て改元す（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百七十四・「天順元年正月丙戌（二十一日）」条）。

では、ここで「改元」と記されているのは、「資治通鑑綱目」的正統観からすると、どういう意味を持っているのであろうか。

『資治通鑑綱目』凡例では、正統王朝の「改元」は、つぎのように説明される。

凡そ中歳にして改元し、事義（特別の理由）無き者は、後を以て正と爲す。其の廢興の際に在りては、義理（道理）の得失に關する者は、前を以て正と爲し、改むる所を下に注す（凡例・「改元」条：清・康熙四十六年〔一七〇七〕揚州詩局刻本『資治通鑑綱目全書』・十六葉）。

歳の始めではなく途中から改元するのに、特別の理由がない場合は、改元した後の元号を正統とみなす。その廢興の際には、道理の得失にかかわるものは、改元前の元号を正統とみなし、改められた理由を注記する、というのである。

すると、英宗「實錄」に「復位するを以て改元す」とあるのは、王朝の興廢の際の改元でもなく、また特に注記もされていないので、「資治通鑑綱目」的な正統観からすると、正統な「改元」であったと評価されていたといえる。

ちなみに、英宗の立場にたって編纂された英宗「實錄」だけでなく、清政権が、朱子の『資治通鑑綱目』の義例に則って編纂させた『御撰資治通鑑綱目三編』（乾隆十一年（一七四六）御製序：二十卷本）の景泰帝の即位の条にも、

〔春正月〕改元して大赦す（『御撰資治通鑑綱目三編』（二十卷本）卷八・一葉・「英宗天順元年春正月」条）。

と記されているので、清政権もこの「改元」を正統なものと認めていたと考えられる。

さて、改元を行なった英宗は、「改元」をした日につぎのような詔をだす。

〔天順元年正月丙戌（二十一日）〕詔して曰く、朕（英宗）^{むかし}昔恭しく天命を膺け、大統を嗣ぎ承く。十有五年^{ママ}民物康阜（人々は安樂で豊か）なり。〔しかし〕不虞（思いがけない）の北虜の變あり。惟だ宗社生民を以ての故に、親から六師を率い、庶弟の郕王を以て監國とす。意わ^{おも}ず兵律（軍隊の統制）御を失い、乘輿 遮てらる。時に文武の群臣 既に皇太子を立てて之を奉ず。豈に期せん監國の人、遽に當宁（皇帝）の位を攘（ぬすむ）せんことを。皇天 禍を悔い、虜酋 心を格^{ただ}し、朕（英宗）を奉じて南還す。〔景泰帝は〕既に復辟の誠無く、反って〔朕（英宗）を〕幽閉するの計を為す。旋いで皇儲（皇太子）を^か易え、己の子を立つ。惟だ天^{たす} 佑けず、未だ久しからざるに亡くなる。諫諍（直言）を杜

絶し、愈益^{ます}ます執迷（固執して悟らない）す。矧^いんや失德（罪過）の良^{まこと}に多く、沉疾（重病）の療^{いや}し難きを致し、朝政 臨^{すなわ}まず、人心 斯れ憤るをや。廼^{すなわ}ち今月十七日、朕（英宗）

公・侯・駙馬・伯及び文武の群臣・六軍・萬姓の擁戴する所と為り、遂に命を聖母皇太后に請い、祇^{つつし}みて天地・社稷・宗廟に告げ、今年正月十七日を以て復して皇帝の位に即き、其の景泰八年を改めて天順元年と爲し、天下に大赦し、咸な與に維れ新たにす。所有^{あら}ゆる合^{まさ}に行なうべきの事宜（事務事項）もて後に條示す。……於戲、「多難もて邦を興す」は、高帝（漢の高祖）平城を脱し、漢を肇^{はじ}むあり。「殷憂（憂傷）もて聖を啓^{たす}く」は、文王 羑里より出で、以て周を開くあり。天地 既に其の正（正統）に復す。人心 是に由り以て咸な安んず。諮^あ爾^{あなんじ}萬方（各地）の臣民、同じく忠誠を秉^とり、皇極（帝王の打ち建てる中正不動の標準：『書經』洪範）に會^あ歸^きし、予が政理（政治）を弼^{たす}け、永しえに太平を享けん。天下に布告し、咸な聞知せしめよ（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百七十四・「天順元年正月丙戌（二十一日）」条）。

①内乱が重なりながら、それによって国家を安定し、領土をひろげる：「左傳」昭公四年に「鄰國之難、不可虞也。或多難以固其國、啓其疆土。或無難以喪其國、失其守宇（鄰國の難は、虞^{のぞむ}可からず。或いは難多くして以て其の國を固くし、其の疆土を啓く。或いは無難無くして以て其の國を喪い、其の守宇を失う）」。

②『晉書』元帝紀に「或多難以固邦國、或殷憂以啓聖明（或いは難多くして以て邦國を固くす、或いは殷憂し以て聖明を啓く）」。

③『書經』洪範に「會其有極、歸其有極（其の有極に會し、其の有極に歸^きす）」。

朕（英宗）は、以前うやうやしく天命をうけて、皇位を繼承した。治世の十五年（十四年）人々は安楽で豊かであった。しかし思いがけない北虜の騒乱があり、ただ国家や人々のために、みずから軍隊を率いて出陣し、庶弟の郕王を監國とした。ところが、思いもよらず軍隊が統制を失い、陣中に乗輿が隔てられてしまった。その時、北京の文武の臣が皇太子を立て仕えた。どうして監國の郕王がにわかに皇位を盗むようなことに思っていたであろうか。天は、禍を悔いて、虜酋は心を正して、朕（英宗）を奉じて帰還させた。郕王（景泰帝）は、皇位を返還するような誠意を持ち合わせず、反対に「朕（英宗）を」幽閉するといはかりごとをなした。その上、皇太子（英宗の長男の見深：後の憲宗成化帝）を変更して、自分の子の見済を皇太子に立てた。ただし天は郕王（景泰帝）に佑助（味方）せず、しばらくして皇太子に立てた見済は亡くなってしまう。また、郕王（景泰帝）は直言を杜絶し、益々自分に固執してしまった。ましてや失徳がほんとうに多く、郕王（景泰帝）の重病の癒しにくく、政務に臨まず、人々が憤るにおいてはなおさらである。そうして、本月十七日に朕（英宗）は諸功臣や文武の臣や軍隊や人々の推戴するところとなり、とうとう皇太后に願い出て、天地・社稷・宗廟に報告して、正月十七日をもって帝位に復帰して、郕王（景泰帝）の景泰八年を天順元年とし、天下に大赦して、すべてを刷新した。内乱が重なりながら、それによって国家を安定し、領土をひろげる

というのは、漢の高祖が匈奴に囲まれた平城を脱出し、漢王朝を創始したようなものである。深い憂いから聖なる明知を悟り啓いたのは、周の文王が殷の誅王によって羈里されたものの周の礎を築いたようなものである。天下はすでに正統に戻った。人々はそのおかげで安堵した。各地の臣民は、忠誠をかたく守り、帝王の打ち建てる中正不動の標準（蔡沈「書集傳」の解釈による）に帰一して、朕（英宗）の政治を輔佐し、ともに永遠に太平を享受しよう。天下に布告して、人々に告知せよ、という。

英宗は、

①監國の郕王（景泰帝）が皇位を盗み即位し景泰帝となる。

②英宗に皇位を返さず、幽閉した。

③皇太子を自分の子供に変更した。

という三点を挙げて、郕王（景泰帝）を非難する。

「豈に期せん監國の人、遽に當宁（皇帝）の位を攘（ぬすむ）せんことを」などと、記している個所などは、たとえ英宗が復辟を果たした奪門の変の時に功績のあった徐有貞（初名は理。字は元玉、号は天全・天存・元武・省齋など。江蘇吳縣の人。永樂五年（一四〇七）～成化八年（一四七二）。宣德八年癸丑科（一四三三）二甲三十三名の進士）の手になるものであっても²⁾、英宗の郕王（景泰帝）に対する思いそのものであったのではないだろうか。

『實錄』によると、英宗は、同日に宗廟にも復辟の報告を行なっている。ただし、宗廟への

2) 陸鉉（正徳『姑蘇志』（第五十二・人物十・名臣）などによると、字は鼎儀。江蘇崑山の人。天順八年甲申科（一四六四）一甲二名の進士（會試では會元）：この科は試験場の火災により會試は八月に挙行され、殿試は翌年の天順八年甲申（一四六四）に行われた。そのため天順七年癸未科（一四六三）ともいう：『病逸漫記』を陸鉉が著したというのは、乾隆『江南通志』以後の地方志に見える）の『病逸漫記』によると、この疏は徐有貞の手になるものようである。

〔天順元年〕諸學士〔英宗の〕復位の詔を草（下書き）するに、〔徐〕有貞のみ獨り署（書く）せず、已にして上（英宗）故を問う。〔徐〕有貞乃ち別に詔草を挾みて以て進む。内に「豈期監國之人、遽攘當宁之位（豈に期せん監國の人、遽に當宁（皇帝）の位を攘（ぬすむ）せんことを）」等の語ありと云う（『病逸漫記』無卷數：『四庫全書存目叢書』（子部・240冊）所収の「明白崔山房鈔本」による）。

①『四庫全書總目』によると『病逸漫記』は、「明の陸鉉撰。是の書は當時の事實を雜記す……是の書は猶お以て志乘の採に備う可し。然れども其の他の多くの冗瑣の談は、盡くは考證に資するに足らざるなり」（『四庫全書總目』卷一百四十三・子部五十三・小説家類存目一・「病逸漫記」条）といわれる。

黃雲眉の『明史考證』は、『紀錄彙編』所収の『病逸漫記』を引用し、このことは「當に信すべきなり」とする。

按ずるに詔は『實錄』に載す。『病逸漫記』に謂う「徐有貞獨り此の詔を草して云う、諸々學士復位の詔を草し、〔徐〕有貞獨り署せず。已にして上（英宗）故を問う。〔徐〕有貞乃ち別に詔草を挾みて以て進む、内に「豈期監國之人、遽攘當寧（『病逸漫記』も『實錄』も「宁」に作る）之位」等の語ありと云う。蓋し景泰帝纂を爲すと謂うなり」^①。今、丙戌（二十一日）の詔を検べるに中に此の二語を著す。則ち〔徐〕有貞の手に出ずの言當に信すべきなり（中華書局一九八五年刊『明史考證』第一冊・一一九頁・明史卷十二（英宗後紀）考證「天順元年春正月丙戌、詔赦天下」条）。

①『紀錄彙編』所収の『病逸漫記』は、黃雲眉の引用どおりである。しかし、『四庫全書存目叢書』（子部・240冊）所収の「明白崔山房鈔本」は、「蓋し景泰帝纂を爲すと謂うなり」の句がない。

報告ということからか、郕王（景泰帝）が病気になったために、やむをえず帝位に復帰したというのみである。

〔天順元年正月〕丙戌（二十一日）、復位・改元を以て寧陽侯の陳懋を遣りて太廟に告げ、及び駙馬都尉の薛桓を遣りて長陵（永樂帝）・獻陵（仁宗洪熙帝）・景陵（宣宗宣德帝）に告げしむ。其の告辭に曰く、祁鎮（英宗）は不腆（浅はか）にして、退居し閑逸（隠居してすごす）すること七年なり。茲頃に于いて弟皇帝の祁鈺（景泰帝）疾有るに因り、躬から郊社宗廟を祀り、朝政を臨視する能わず。人心 危疑し、自から安輯（安定）せず。乃ち文武群臣の擁戴する所と為り、已む得ず、十七日に於いて復して皇帝の位に即き改元し、以て國家を安んず。茲に特に齋を致し謹しみて用って告知す（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百七十四・「天順元年正月丙戌（二十一日）」条）。

寧陽侯の陳懋を太廟に、駙馬都尉の薛桓を長陵（永樂帝）・獻陵（仁宗洪熙帝）・景陵（宣宗宣德帝）にそれぞれ派遣して、英宗の復位と改元とを報告させた。その告辭は、「祁鎮（英宗）は、浅はかであったため、隠居して過ごすこと七年でありました。この頃、弟の皇帝の祁鈺（景泰帝）が病気となり、自分から宗廟を祀り、政務を執ることができなくなりました。人々は危惧し、安定しませんでした。そこで、文武の諸臣よって推戴されたため、やむを得ず、十七日に帝位に復帰して改元を行ない、國家を安定させました。ここに齋戒して謹んでご報告申し上げます」であった、という。

同しくこの日に、駙馬都尉の焦敬を太祖高皇帝・孝慈高皇后の廟に派遣して、ほぼ同じ内容の報告を行なっている。やはり、郕王（景泰帝）が病気になったために、やむをえず帝位に復帰したと報告するだけである。

駙馬都尉の焦敬^①を遣りて香幣（祭祀に用いる香と幣帛^{へいはく}）を祇奉（謹んで献上する）し、太祖高皇帝・孝慈高皇后に昭告（明白に告知する）して曰く、祁鎮（英宗）は不徳にして先訓を奉承する能わず、在位十有五年中に變を罹る故に南宮に退居すること、又た七年なり。
^{このころ}比、弟の祁鈺（景泰帝）疾有りて視朝する能わず、庶政（各種の政務）結する莫きを以て人心 危疑す。在廷の文武の群臣 宗社の大計を以て協力同心して祁鎮（英宗）を迎復し、萬幾を總理し、以て天下を安んぜしむ。已に今年の正月十七日に於いて、^{つつし}祇みて天地・宗廟・社稷に告げ、復して皇帝の位に即き、大赦・改元し、庶政を一新す。皆な祖宗在天の靈 茲に庇廕（庇護）を垂れ、^{ふところ}懷に倦切（懇切）にし、夙夜 忘れざるに頼らん。茲に特に敬みて伸（報告）し祭告す（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百七十四・「天順元年正月丙戌（二十一日）」条）。

①焦敬は、仁宗洪熙帝の第二女の慶都公主を娶る。慶都公主は、宣德三年（一四二八）に焦敬に下嫁し、

正統五年（一四四〇）に薨ずる（『明史』明史卷一百二十一・列傳第九・公主・「慶都公主」条による）。

駙馬都尉の焦敬を派遣して香と幣（幣帛^{へいはく}）を謹んで献上し、太祖高皇帝（太祖洪武帝）・孝慈高皇后（馬皇后）に昭告（はっきりと告げる）して以下のようにいう。祁鎮（英宗）は不徳で

あり、ご先祖様のお教えをうやうやしく承ることができず、十五年の在位途中で変乱に巻き込まれたため、南宮で七年間隠居しておりました。近頃になって弟の祁鈺（景泰帝）が病気になり政務を執ることができなくなり、各種の政務が滞ったことから、人々は危ぶみ疑うようになりました。そこで、朝廷の文武の諸臣は、国家の大計から一致協力して、私、祁鎮（英宗）を復辟させて、あらゆる政務を統轄させて、天下を安定させようと思いました。すでに今年の正月十七日につつしんで天地・宗廟・社稷に報告して、帝位に復帰し、大赦・改元を行ない、諸政を一新しました。すべては、上天にいらっしゃるご先祖様が、庇護を下して、ふところに置いて懇切にし、日夜お忘れにならないことにお頼りいたします。ここにつつしんで報告申し上げます、という。

そして、天順元年二月一日になり、皇太后³⁾の諭（自発的に下す訓示）が出される。そこでは、英宗の正月二十一日の復辟の詔の内容よりさらに激しく郕王（景泰帝）が非難される。

天順元年二月乙未朔、皇太后 制（勅命を伝える文書）もて宗室・親王及び中外の文武羣臣に「以下のように」諭す。仰ぎ惟うに太祖高皇帝・太宗文皇帝 帝業を開創し、華夷を統御す。仁宗昭皇帝（洪熙帝） 鴻猷（大業）を繼述（継承）し、大いに治理（統治）を敷く。承傳して我が宣宗章皇帝の「克く寛、克く^①仁」にして、萬邦 允懷（帰順）するに至る。不幸にして蚤に臣民を棄て、命を吾に遺す。爰に嫡長子の祁鎮（英宗）を立てて皇帝と為ること、已に十有五年を歴。敬天勤民（心や力を民事に尽くす）にして、[政務を]怠ること無く^{すさ}荒むこと無し。比に虜寇^{しきり}の邊を犯し、生靈の荼毒（害毒）は恐るることと為り、禍 宗社^{およ}に延ぶに因り、已むを得ず親から六師を率い、以て之を禦ぐ。此れ實に天下を安んずるの大計なればなり。意わずも兵將 失律し、乘輿 遮てらる。時に爾ら文武の群臣 社稷を以て重しと為し、宣宗皇帝の遺詔を恪遵（恭謹に遵守する）し、表もて吾に皇帝の長子の見深を立てて皇太子と為すを請う。其の幼冲に因るに于いて、吾れ仍お庶次子の郕王祁鈺（景泰帝）に之を輔せんことを命ず。豈れ[景泰帝は]性 本とより梟雄（凶暴な野心家）にして、過^{すみやか}に天位に據けり。已而（久しからず）にして虜酋 天を畏れ、帝徳^{あやま} 愆ち罔く、歴數（帝位継承の順序）の在る有りを知り、帝を奉じて京に回すを期す。

3) この皇太后は、宣宗宣德帝の皇后、英宗の生母の孫氏である。皇太后孫氏は、郕王（景泰帝）が監國に就く時や即位する時に敕書を出している（拙稿「明・景泰帝の諡號について（1）」（『経済理論』第367号）参照）。なお、孫氏については、拙稿「明・景泰帝の諡號について（1）」（『経済理論』第367号）の注（4）参照。

ただし厳密にいうと、この二月一日の段階では、郕王（景泰帝）の生母の呉氏は、まだ皇太后であった。景泰帝の生母の呉氏は、正統十四年九月に景泰帝が即位すると、その十二月に皇太后となり、天順元年二月六日に廢されて妃となっている。

〔天順元年二月庚子（六日）〕命じて郕王（景泰帝）の立つる所の皇太后呉氏は宣廟の賢妃に復號し、〔郕王（景泰帝）の〕皇后汪氏は復して郕王妃と為し、〔早世した郕王（景泰帝）の〕懷獻太子見濟は懷獻世子と為し、肅孝皇后杭氏及び貴妃唐氏は俱に其の封號^{あらた}を革む（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之二百七十五・「天順元年二月庚子（六日）」条）。

而るに祁鈺（景泰帝）既に天位を貪り、曾て復辟の心無し。乃ち邪謀（陰謀）を用い、反って幽閉の計を為し、皇儲（皇太子）を廢出し、私に己が子を立て、綱常を斃敗（敗壞）し、彝典（舊典）を變亂し、「淫酗を縱肆にし」^②、「姦回を信任し」^③、奉先（祖先を祭祀する）の傍殿を毀ち、宮を建て以て妖妓を居き、緝熙（光明）なる便殿（宮中の休息所）を汙し、戒を受け、以て胡僧に禮す。濫りに賞し、妄りに費して無經（常規がない）なり、急ぎ徴し暴斂（徴税を強行する）するに無藝（限度がない）なり、府藏（財物）空虚にして、海内窮困す。不孝不弟にして、不仁不義なり。穢德（悪い行い）彰聞し、神人共に怒る。上天震威し、屢しば明象を垂るるも、祁鈺（景泰帝）恬として知省（反省して検討してみる）せず、拒諫飾非（忠告を拒絶して間違いを覆い隠す）し、造罪（罪を受けること）愈いよ甚だし。既に其の子を絶ち、又た其の身に殃して疾とし、「病彌いよ留まる」（『書經』顧命に「病日臻、既彌留（病 日々に臻り、既に彌いよ留まる）」）なり。朝政遂に廢れ、中外危疑す。人正統を思い、乃ち今年の正月十七日に先朝の内臣暨び公・侯・駙馬・伯・文武の群臣・六軍・萬姓同誠し表もて請うに於いて、已に皇帝の大位に復正し以て羣情を慰め、以て宗社を安んずるを命ず。惟うに天道善に福し、淫に禍いすれば、吾當に體天（天命に依據する）し以て行罰（懲罰）すべし。人心善を好み惡を惡めば、吾當に順人（民心に従う）し以て名を正すべし。母子の至情と雖も、大義に於いては宥し難し。其れ景泰を廢し、僭子の祁鈺もて仍お郕王と為すこと漢の昌邑王の故事の如くし、已に群臣をして西内（皇宮の西部）に送歸せよ。[そして]、安養（安息休養）するを知らしめよ。於戲、天下は乃ち祖宗の開創する所なり、天位は乃ち列聖（歴代の皇帝）の相い傳うる所なり。天位既に復し、人心乃ち安んず。天下に布告し、咸な聞知せしめよ、と（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之二百七十五・「天順元年二月乙未朔」条）。

①『書經』仲虺之誥に「克寬克仁、彰信兆民（克く寛、克く仁、信を兆民に彰かにす）」。

②『書經』泰誓中に「淫酗肆虐、臣下化之（淫酗にして虐を肆にし、臣下之に化す）」。

③『書經』泰誓下に「崇信姦回、放黜師保（姦回を崇信し、師保を放黜す）」。

仰ぎ思うに太祖高皇帝・太宗文皇帝は、帝業を創始され、華夷（漢民族と異民族）を統御（統一支配）された。仁宗洪熙帝は、その大業を継承され、統治をおし広められた。それを受け継がれてわが宣宗宣德帝は、寛大で思いやり深く、あまたの国が帰順してくるようになった。不幸にして早くに臣民をお棄てになり（三十七歳で亡くなる）、遺命を私に伝えられた。ここに嫡長子の祁鎮（英宗）を立てて皇帝として、十五年が経過した。祁鎮（英宗）は、天を敬（つ）んで民の事に心や力を尽くし、[政務を]怠ることがなく、[政務を]廢することもなかった。そうこうするうちに、しきりに虜寇が辺境を犯し、人々はその損害を恐れるようになり、禍は国家に及ぶようになり、やむを得ず英宗みずから軍隊を率いて出陣し、これを防ごうとした。これが、天下を安んずる大計であったからである。ところが、思いもよらず軍隊が統制を

失い、陣中に乗輿が隔てられてしまった。その時、なんじら文武の諸臣は、国家を重視して、宣宗宣徳帝の遺詔をつつしんで遵守し、私（皇太后）に英宗の長子の見深を立てて皇太子とすることを願い出てきた。ただし、その幼いことから、英宗の弟の郕王祁鈺（景泰帝）にその補佐を命じた。なんということか郕王祁鈺（景泰帝）は、性質が凶暴な野心家であって、すぐに帝位についてしまった。しばらくして、虜酋は天を畏れて、帝王の心は間違いがなく、帝位継承の順序があることを悟り、英宗を北京に帰還させることをきめた。しかるに祁鈺（景泰帝）は、帝位にいることに汲々として、皇位を返還するような気がなかった。そして、陰謀して、英宗を幽閉するとはかりごとをなし、皇太子（英宗の長男の見深：後の憲宗成化帝）を変更して、自分の子を見済を皇太子に勝手に立て、守るべき道德を破壊し、古くからの取り決めを改悪し、大酒を飲み暴虐のかぎりを尽くし、邪悪な臣を信任し、奉先（祖先を祭祀する）の傍殿を毀ち、宮殿を建てて妖妓を住ませ、緝熙（光明）な便殿（宮中の休息所）を汙し、戒律を受けて胡の僧侶を礼遇した。気ままに賞賜し勝手に浪費して決まりがなかった。急激な税の取り立てをおこない限度がなかった。財物倉庫は空っぽになり、天下は困窮した。まったく不孝不弟で不仁不義である。こうした悪行が広く伝わることとなり、神々も人々も共に怒った。天は恐れおののかせ、しばしばはっきりとした兆候を示したが、祁鈺（景泰帝）は少しも気かけず、反省して悟ろうとせず、忠告を拒絶して間違いを覆い隠し、罪を受けることますます甚だしかった。すでに無理やり皇太子に立てた自分の子供が亡くなり、自分の身にもわざわいが及んで病気になった、そして病にますますとりつかれた。政務は執り行われず、内も外も危惧した。そうした時に、人々は正統な継承者の英宗のことを思った。そこで今年の正月十七日に先朝の大臣や公・侯・駙馬・伯や文武の諸臣・庶民などが気持ちを一つにして願い出たことから、英宗の帝位を復活させて皆を安心させ、国家の安定を命じた。考えるに天道は善には福をあたえ、ほしいままにすることには禍をくだすのであるから、私（皇太后）は天の命ずるままに懲罰を行なうべきである。人々も善を好んで悪を惡むのであるから、私（皇太后）は人々の気持ちに従って名を正すべきである。母と子との至情であっても、大義の前では許し難い。そこで「景泰」の年号を廃止して、本分を越えて皇帝となった祁鈺（景泰帝）を漢の昌邑王の故事のように本来の郕王とし、諸臣をつかって内宮の西に送り届けさせよ。そして、祁鈺（景泰帝）にはそれは安息休養することであることを知らしめよ。ああ、この天下は祖宗の創始されたものである。また、帝位は歴代の皇帝の伝承してきたものである。帝位はもとに戻り、人心は満足している。このことを天下に布告して、皆に知らしめよ、という。

ここでも、

- ①監國の郕王（景泰帝）が皇位を盗み即位し景泰帝となる。
- ②英宗に皇位を返さず、幽閉した。
- ③皇太子を自分の子供に変更した。

の三点を非難することは、同じであるが、英宗の詔の「諫諍（直言）を杜絶し、愈益ますます執迷

(固執して悟らない)す。矧^いんや失徳(罪過)の良^{まこと}に多く、沉疾(重病)の療^いし難きを致し、朝政 臨まず、人心 斯^これ憤るをや」の個所が増幅されて、さらに激しい郕王(景泰帝)批判が展開される。

ここにおいても、皇太后の名に借りて、英宗の郕王(景泰帝)に対する感情が、はっきりと記されているように推測できる。

この態度について、清・乾隆帝は、つぎのようなことをのべる。

景泰[帝]の大位を襲據(不意に即く)するは、自^{おの}ずから千秋の公論の容れざる所なり。英宗 既^{すで}已に復辟すれば、固より包荒(寛大)として以てを大度を示すを妨げず。況んや實に據りて「改元して大赦するを」宣布するをや・・・(『御批歷代通鑑輯覽』卷一百五・「景泰八年正月、改元大赦」条の批文)。

景泰帝が不意に帝位を即いたのは、千秋の公論が承認しないことである。この時になって、英宗がすでに復辟したのであるから、「景泰帝を非難することなく」寛大で度量の大きいことを示しても差し障りがなかった。ましてや、正式に改元大赦したのであるからなおさらであるという。

清・乾隆帝は、天子としての度量を示すべきであったと批評するのである。

そして、二月九日には、欽天監掌監事禮部右侍郎の湯序が、「郕王(景泰帝)はもとの王になっておりますので、義としては郕王(景泰帝)が皇帝であった時に用いた「景泰」の年号^{あらた}を革めるべきです。いま、欽天監の作成している天順二年の暦日の最後の部分に書いてある「景泰」の年号は、英宗のももとの「正統」の年号に書き変えたいと思います」と奏上した。それに対して英宗は、「郕王(景泰帝)の用いていた年号は、改めるべきではあるが、兄弟の親しさを考えると忍び難い。そこで、ももとの「景泰」の年号で記せ」という。永楽帝が建文帝に対して行ったような、年号の抹殺までは行わなかったのである。

[天順元年二月癸卯(九日)] 欽天監掌監事禮部右侍郎の湯序 奏すらく、「郕王(景泰帝)

既に舊藩に復す。義 當に其の年號を革むべし。今、本監の成造する天順二年の暦日は、其の暦の尾の書する所の「景泰」の年號は、宜しく復するに「正統」の年號を以て之を書せん」と。上(英宗) 曰く、「郕王(景泰帝)の年號は當に革むべし。但だ朕(英宗) 天倫(兄弟)の親しきを念い、忍びざる所有り。其れ舊に仍りて之を書せ」と(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之二百七十五・「天順元年二月癸卯(九日)」条)。⁴⁾

なお、この湯序は、英宗「實錄」によれば、いわゆる奪門の變の企てに参画したとして昇進した人物である。

[天順元年正月己丑(八日)] 欽天監中官正(正六品)の湯序^{のぼ}を陞(昇進)して禮部右侍郎(正三品)と為し、仍お欽天監の事を管(管理)せしむ。[その昇進は] 太監の曹吉祥(奪門の變の中心人物のひとり)が「[湯] 序は迎駕に與謀す」と奏するに従うなり(『大明英

宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百七十四・「天順元年正月己丑（八日）」条）。

そうして、二月十九日に邸王（景泰帝）は薨じる⁵⁾。英宗は、禮部に葬祭の禮を提案させる。禮部は、親王の禮に準じて行ない二日間視朝を輟め、發引の日にはさらに一日間視朝を輟めることを提案する。英宗は、それに従うものの、諡は「戾」とするように命令する。

〔天順元年二月〕癸丑（十九日）、邸王（景泰帝）薨ず。上（英宗）禮部に命じて葬祭の禮を議（提案）せしむ。禮部議（提案）するに親王の例の如くし、視朝を輟むこと二日、發引に至り、復た朝を輟むこと一日とす。上（英宗）之に従う。命じて諡して「戾」と曰う（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之二百七十五・「天順元年二月癸丑（十九日）」条）。

皇帝が亡くなった時に用いる「崩」ではなく、王侯に用いる「薨」とするのは、この時点では邸王になっていたからであろう⁶⁾。ただ、この時、慣例と異なり、英宗は、元皇帝の邸王（景泰帝）の葬礼について、禮部に提案させている。そこで、禮部は、親王の喪の「輟朝三日」の

- 4) 陳建(字は廷肇、号は清瀾。廣東東莞の人。弘治十年(一四九七)～隆慶元年(一五六七)。嘉靖七年(一五二八)の舉人)の『皇明歷朝資治通紀(皇明通紀)』は、つぎのようにいい、「實錄」の記載にほぼ沿っている。ただし、曆のことが省略され「欽天監 奏して「景泰」の年號を革除せん」と記されているため、欽天監が「景泰」の年號の全面的な削除を願ひ出たように理解できるような書き方になっている。さらに、「實錄」によれば、「曆の記載については「舊に仍りて之を書せ」ということになるのであるが、曆の記載ということが省略されていたため、誤解をまねく表現になっている。

〔天順元年二月〕・・・欽天監 奏して「景泰」の年號を革除せんと。上（英宗）曰く、朕（英宗）心に忍ばざる所有り。舊に仍りて之を書せ、と・・・（『皇明歷朝資治通紀(皇明通紀)』卷之十七・「丁丑天順元年」条）。

①当時、「建文」の年号を抹殺することを「革除」といっていたので、ここで「革除」という文字が用いられたのかもれない。

『國權』は、「實錄」ではなく、この『皇明歷朝資治通紀(皇明通紀)』の系統の節略本に「舊に仍りて之を書せ」とあることによったからなのか、湯序が「景泰」の年號の全面的な削除を願ひ出た、その提案は、「命じて之に仍らしむ」と意味が通るように修正されている。ただしそれでは、「景泰」の年號は改められたと誤解されてしまう。

〔天順元年二月癸卯（九日）〕署欽天監事禮部右侍郎の湯序「景泰」の年號を革めんことを請う。命じて之に仍らしむ（『國權』卷三十二・「英宗天順元年二月癸卯（九日）」条・二〇三一頁）。

ただし、清朝になると、「實錄」を参照したようで、『御撰資治通鑑綱目三編』（乾隆十一年（一七四六）御製序：二十卷本）の「二月廢景泰帝仍爲邸王、遷之西内」条は、

・・・欽天監監正の湯序「景泰」の年號を革除せんことを請う。帝（英宗）從わず（『御撰資治通鑑綱目三編』（二十卷本）卷八・二葉・「二月廢景泰帝仍爲邸王、遷之西内」条）。

と記される。

また、清・夏燮(字は曠父。安徽當塗の人。嘉靖五年〔一八〇〇〕～光緒元年〔一八七五])の『明通鑑』（清・同治十二年（一八七三）宜黃刊本）も、湯序が「景泰」の年號の全面的な削除を願ひ出たと記載されているが、その提案は、「許さず」とする。

時に湯序「景泰」の年號を革除せんことを請う。許さず（『明通鑑』卷二十七・紀二十七・「英宗天順元年二月乙未（一日）」条・十八葉）。

規定⁷⁾にしたがって、二日間視朝^{みし}を輟め、發引の時に一日視朝を輟めるように提案する。英宗は、その提案に従うが、諡は、「戾」とすることを命ずる。

ふつう「實錄」では、親王の喪が伝わると、例えば、太祖の第十九子（『明史』列傳・諸王三・「韓王松」は第二十子とする）の韓王松が、永樂五年に薨じた時、兄にあたる永樂帝は、
 [永樂五年十月]庚戌(三十日),韓王薨ず。[韓]王 諱は松,太祖高皇帝の第十九子なり……
 是^こに及び薨ず。上(永樂帝) 為^ために震悼^やし,朝を輟めること三日。官を遣りて祭りを致す。
 諡して「憲」と曰う(輟朝三日,遣官致祭。諡曰「憲」。以未就國,勅有司塋葬安德門外,

✓ 5) 陸鉞^{よく}の『病逸漫記』に、

景泰帝の崩ずるは、「宦者の蔣安 帛を以て死^{せま}を勒る」と爲す（『病逸漫記』無卷數：『四庫全書存目叢書』（子部・240 冊）所收の「明白崔山房鈔本」による）。

とある。

しかし、黃雲眉は『明史考證』の「八年二月癸丑，王薨於西宮，年三十」条で、この『病逸漫記』を引用し、「信ず可きや否やを知らず」と述べる。

按ずるに『病逸漫記』に「景泰帝の崩ずるは、宦者の蔣安 帛を以て死^{せま}を勒る、と爲す」と謂う。其の信ず可きや否やを知らず（中華書局一九八五年刊『明史考證』第一冊・一一九頁・明史卷十一（景帝紀）考證・「八年二月癸丑，王薨於西宮，年三十」条）。

なお、陳建（字は廷肇，号は清瀾。廣東東莞の人。弘治十年（一四九七）～隆慶元年（一五六七）。嘉靖七年（一五二八）の舉人）の『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』は、二月一日の皇太后の誥諭と二月十九日の出来事をまとめて、つぎのように記す。

[天順元年]二月朔，皇太后 誥諭ありて，景泰帝を廢し，仍お郕王と爲し，西内に歸す。越えて數日，命じて郕王の立てる所の皇太后呉氏を復た宣廟（宣宗宣德帝）の賢妃と爲し，皇后汪氏を廢して復た郕王妃と爲す。欽天監「景泰」の年號を革除せんと奏す。上（英宗）曰く，朕（英宗）心に忍ばざる所有り。舊に仍りて之を書せ，と。是の月の十九日，郕王 薨ず，葬祭の禮は親王の如くす。諡して「戾」と曰う。妃嬪唐氏等 俱に紅帛を賜いて自盡させ以て殉葬す（『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之十七・「丁丑天順元年」条）。

天順元年二月一日，皇太后の誥諭（告示）が出され，景泰帝の帝位を廢止し，もとの郕王とし，宮中の西内に置いた。數日後，命じて郕王（景泰帝）の立てた皇太后呉氏を宣廟（宣宗宣德帝）の賢妃にもどし，皇后汪氏の皇位を廢止して，もとの郕王妃とした。欽天監から「景泰」の年号を抹殺するようにとの奏上がなされたが，英宗は「心に忍びないところがあるので，[曆の記載にある「景泰」の年号を抹殺することはせずに]そのままにして変更しないように」という。二月十九日に郕王（景泰帝）が薨じた。葬祭は親王の禮に準じるようにした。諡は「戾」とする。妃嬪の唐氏等に紅帛を賜いて自盡させて殉葬した，というのである。

それが、『國榷』では，つぎのように記される。

[英宗天順元年二月]癸丑（十九日），郕王（景泰帝） 薨ず。祭葬の禮は親王の如くす。諡して「戾」と曰う。帝（景泰帝） 恭儉（恭謹謙遜）明達（物事に通じる）にして，人を知り善く任使（差遣，委用）す。卒に「弘いに艱難を濟う」。宗社 之に頼る。[卒]年 □十□なり。陸鉞^{よく}の『病逸漫記』に曰く，「宦者の蔣安 帛を以て死^{せま}を勒る」と（『國榷』卷三十二・「英宗天順元年二月癸丑」条・二〇三三頁）。

①『書經』顧命に「今天降^{あやう}疾^{あやう}殆^{あやう}，弗興弗悟，爾尙明時朕言，用敬保元子釗，弘濟于艱難（今，天 疾を降して殆し。興さず悟らず，爾 尙くは時の朕が言を明らかにし，用て敬しんで元子釗を保んじ，弘いに艱難を濟え）」。

英宗天順元年二月]癸丑（十九日）に郕王（景泰帝）が薨じた。葬祭は親王の禮に準じた。諡は，「戾」とした。景泰帝は，恭しく謙遜で物事に通じ，人を見極めてうまく任用した。とうとう「おおいに危機から救う」。国家は，景泰帝を頼りとした。卒年は，□十□歳である。陸鉞の『病逸漫記』には，「宦官の蔣安がしろぎぬをもって自死を逼った」とある，という。

恤典特厚云) (『大明太宗體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝實錄』卷之七十二・「永樂五年十月庚戌(三十日)」条)。

というような儀礼を行ない、仁宗洪熙帝の第三子の越王瞻墉が薨じた時、孫の英宗は、
 [正統四年六月] 壬寅(二十六日)、越王瞻墉 薨ず。[越] 王は、仁宗昭皇帝の第三子、太皇太后の出なり・・・是に至り薨ず。年三十五なり。訃 聞し、上(英宗) 哀悼し、視朝を輟むること三日。官を遣りて祭りを致す。諡して「靖」と曰う。有司に命じて葬を営ましむ(輟視朝三日。遣官致祭。諡曰靖。命有司營葬)。[越] 王 嗣無く、國 除かる(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之五十六・「正統四年六月

-
- ✓ 6) 「資治通鑑綱目凡例」によれば、正統王朝の天子が亡くなった場合は、「崩」という。
 凡そ正統は「崩」と曰う(凡例・「崩葬」条：清・康熙四十六年〔一七〇七〕揚州詩局刻本『資治通鑑綱目全書』・十九葉)。
 周赧王や後漢の獻帝のように天子としての地位を失った人物の場合は、「卒」といった。
 尊を失うは「卒」と曰う(凡例・「崩葬」条：清・康熙四十六年〔一七〇七〕揚州詩局刻本『資治通鑑綱目全書』・十九葉)。
 さらに、廃されて王公となって亡くなった人物も「卒」といい、諡号は注記するという。
 凡そ正統の君、廃されて王公と爲りて死する者は、「卒」と書し其の諡を注す(凡例・「崩葬」条：清・康熙四十六年〔一七〇七〕揚州詩局刻本『資治通鑑綱目全書』・二十葉)。
 すると、景泰帝には「卒」字を用いてもよかったとも考えられる。しかし、「薨」字は、『禮記』にあるように諸王の亡くなった時に用いられる文字であった。
 天子の死するを「崩」と曰い、諸侯には「薨」と曰い、大夫には「卒」と曰い、士には「不禄」と曰い、庶人には「死」と曰う(『禮記』曲禮下)。
 禮部は、景泰帝はすでに廃されて「郕王」となっているため、景泰帝としての事跡を考慮せずに王公につける「薨」字を用いたようである。また、英宗も「戾」と諡することのみに固執して、「薨」字には配慮しなかったように理解できる。
 ちなみに、『御撰資治通鑑綱目三編』(乾隆十一年(一七四六)御製序：二十卷本)にも、景泰帝を廢して郕王としたことを述べて、「郕王(景泰帝)薨」として「薨」字が用いられている。
 [天順元年]二月、景泰帝を廢して仍お郕王と爲し、之を西内に遷す・・・郕王(景泰帝) 薨ず(『御撰資治通鑑綱目三編』(二十卷本)卷八・二葉・「英宗天順元年二月」条)。
 清政権が、朱子の『資治通鑑綱目』の義例に則って編纂させた『御撰資治通鑑綱目三編』も、諸王に用いる「薨」字を用いたことは、正統なことと解釈しているといえる。
- ✓ 7) 萬曆『大明會典』によると、親王の喪が伝わるとつぎのような儀礼が行なわれると述べる。
 [親王] 世子世孫附
 喪 聞し、上 輟朝すること三日。禮部 「差官(官員を派遣する)して、喪祭の禮を掌行(領隊)する」を奏す。翰林院 「祭文」・「諡冊文」・「壙誌文」を撰す。工部 銘旌(故人の事績を記し、葬礼の時に前列に立てる旗)を造り、差官して墳を造る。又た欽天監 官一員を取りて前去して卜葬(墓地や日時を占う)す。國子監 監生八名を取りて訃を各王府に報ず(萬曆『大明會典』卷之九十八・禮部五十六・喪禮三・十葉)。
 『明史』も同じく、「定制」として同じことを伝える。
 諸王及妃公主喪葬諸儀
 定制：親王の喪あれば、輟朝すること三日。禮部 「官を遣りて、喪祭の禮を掌行(領隊)する」を奏す。翰林院 「祭文」・「諡冊文」・「壙誌文」を撰す。工部 銘旌(故人の事績を記し、葬礼の時に前列に立てる旗)を造り、官を遣りて墳を造る。欽天監官 卜葬(墓地や日時を占う)す。國子監監生八名 訃を各王府に報ず(『明史』卷五十九・志第三十五・禮十三・凶禮二・「諸王及妃公主喪葬諸儀」条)。

壬寅（二十六日）」条）。

というような儀礼を行ない、仁宗洪熙帝の第二子の鄭王瞻埈が薨じた時、曾孫の代になる憲宗成化帝は、

〔成化二年五月乙酉（十五日）〕鄭王瞻埈、仁廟（仁宗洪熙帝）の第二子なり・・・・是に至り薨ず。年六十三なり。訃 聞し。上（憲宗成化帝）朝を輟めること三日。官を遣りて祭りを致す。有司に命じて葬事を營ましむ。諡して「靖」と曰う（輟朝三日、遣官致祭、命有司營葬事、諡曰靖）（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之三十・「成化二年五月乙酉（十五日）」条）。

というような儀礼を行なったとあるように、「輟朝三日」・「遣官致祭」・「諡曰■」・「命有司營葬」の四つの儀礼を行なったことを記録するのが（鄭靖王瞻埈の時のように、「命有司營葬」と「諡曰■」の順序が入れ替わって記されることもある）、通常の記述法であったようだ。

ところが、郕王（景泰帝）の場合は、「親王の例」に従い「輟朝」を三日行なうことが提案されるものの、「遣官致祭」・「命有司營葬」の記述がない。さらに、親王に諡号を贈る時は、「實錄」では、

諡曰「■」（諡して「■」と曰う）。

と記すのが「實錄」の記述方法であるが、ここでは「諡曰」の前に「命」字が加えられている。「實錄」でこのような書き方を行なっているのは、管見の及ぶ限りこの時だけである。

この「實錄」の記事によると、郕王（景泰帝）の葬祭は、「輟朝三日」は行われたものの、「遣官致祭」・「命有司營葬」がなく、特に英宗自身が、郕王（景泰帝）に「戾」という諡号を贈ったと考えられる。

すると、この「戾」と諡したことには、復辟の詔や皇太后の制に見られるような英宗の郕王（景泰帝）に対する感情があらわれていると思われる。そこで、続いて、この「戾」字について検討したい。

(2)

『逸周書』諡法解・『史記』正義所引「諡法解」によると、「戾」は、前過（前の過ち）を悔いざるを「戾」と曰う（不悔前過曰戾）孔晁注：知りて改めず⁸⁾とされる。

蘇洵「諡法」も、『逸周書』諡法解・『史記』正義所引「諡法解」と同じで、

戾一

前過（前の過ち）を悔いざるを「戾」と曰う（不悔前過曰戾）。

とする。

また、「戾」字は、『通志』諡略で「下諡法」の六十五字の中の一文字に分類され、

右、六十五の諡は、之を殲夷（誅滅）に用う・之を小人に用う（『通志』卷四十六・諡略第一・諡中）。

誅し滅ばすべき人や、小人に用いる文字であるとする。つまり、否定的にもちいられる文字であった。さらに、『通志』では、つぎのようにもいう。

諡の善惡有る者は、文〔字〕に即きて^つ見^{あら}われ、説〔明〕に即かずして^つ見^{あら}わる。且^{そも}も「戾」と曰い、「刺」と曰えば、豈に其の凶^{あら}徳有るを見^{あら}わさずして、何ぞ必ず「不悔前過」を以て然る後に「戾」と爲し、「暴慢無親^②（暴虐にして親しむ無し：親を^な無みす?）」もて、然る後に「刺」と爲すを得んや。一の「戾」もて足らず、其の説に又た之を益すに「戾」〔の説明文〕を以てす。一の「刺」もて足らず、其の説に又た之を益すに「刺」〔の説明文〕を以てす。古の道に非ざるなり……（『通志』卷四十六・諡略第一・諡上・序論第四）。

①『左傳』文公十八年に「毀則爲賊。掩賊爲藏。竊賄爲盜。盜器爲姦。主藏之名。頼姦之用。爲大凶徳。有常無赦……孝敬忠信爲吉徳、盜賊・藏姦爲凶徳（則を毀つを賊と爲し、賊を^{かくま}掩うを藏と爲し、賄（財）を竊^{ぬす}むを盗と爲し、器（国の宝物）を盗むを姦と爲す。〔賊をかくまうという〕藏の名を主とし、〔国の宝物を盗むという〕姦の用を頼るは、大凶徳と爲す。常（国の常法）有りて^{ゆる}赦さず……孝敬・忠信を吉徳と爲し、盜賊・藏姦を凶徳と爲す）」。

②「暴慢無親曰刺」は、『逸周書』諡法解・『史記』正義所引「諡法解」には見当たらず、蘇洵「諡法」で新たに加えられた説明である。『漢書』武五子傳・「李姬生燕刺王旦、廣陵厲王胥」条の顔師固注に「諡法『暴戾無親曰刺』」とある。蔡邕『獨斷』には、「暴虐無親曰厲」とあり、「厲」字の説明に用いられる。

諡の善惡は、その文字自体に表現されているのであって、説明文なしに理解されるものである。そもそも、「戾」や「刺」などの諡であれば、どうしてそれだけでその凶^{わる}い徳を持っていることを示さず、「不悔前過（前過を悔いず）」という説明を行なって、その後に「戾」の意味だとし、「暴慢無親（暴虐にして親しむ無し：親を^な無みす?）」という説明を行なって、その後に「刺」の意味だとするのであろうか。「戾」という文字だけでは足らず、またそれに「不悔前過」という説明文を付け足す。「刺」という文字だけでは足らず、またそれに「暴慢無親」という説明文を付け足す。これは古の法ではない、という。「戾」は、それだけで悪い意味をあらわし

8) それについて、陳逢衡の『逸周書補注』（道光五年〔一八二五〕刊）では、

前過（前の過ち）を悔いざるを「戾」と曰う。

孔〔晁〕注：知りて改めず

補注：漢戾太子、「戾」と諡す。〔『漢書』宣皇帝紀・「孝宣皇帝、武帝曾孫、戾太子孫也」条の〕韋昭注に「違戾（違反する）を以て^{ほしいま}擅に兵を發す、故に諡して「戾」と曰う」と。唐・楊綰の謚議（『通典』卷第一百四・禮六十四・所引「單複諡議」条）に「漢の宣〔帝〕敢て祖〔の戾太子〕を私せず、謚して「戾」と曰う」と（『逸周書補注』卷十四「不悔前過曰戾」条・四十六葉）。

と注する。

また、潘振（字は芑田、号は餘莊。浙江仁和人）の『周書解義』（嘉慶十年（一八〇五）序）では、

知りて改めず。戾は乖なり（『周書解義』卷六・諡法・「不悔前過曰戾」条・六十一葉）。

と注している。

ているというのである。

このように、否定的な意味を持ち、「前過（前の過ち）を悔いざる」というのが、『逸周書』諡法解・『史記』正義所引「諡法解」以来の理解であったといえる。

また、楊守隨（字は維貞、号は貞菴・文湖。浙江鄞縣の人。（一四三五）～（一五一九）。成化二年丙戌科（一四六六）の三甲一百一名の進士）の「成化六年（一四七〇）八月乙卯（十日）」の上奏文に、

・・・邸王 薨逝し、之に諡して「戾」と曰う。戾とは罪なり、乖なり。諡法に在りては「前過を悔いず（不悔前過）」と為す・・・（『大明憲宗繼天凝道誠明仁敬崇文肅武宏德聖孝純皇帝實錄』卷之八十二・「成化六年八月乙卯」条）。

とある。英宗が「戾」と諡した天順元年から十三年後の成化六年（一四七〇）の時になっても、「戾」は、「前過を悔いず（不悔前過）」と理解されていたのである。

ただ、明の王世貞（字は元美、号は鳳洲、又の号は弇州山人。江蘇太倉の人。明・嘉靖五年〔一五二六〕～萬曆十八年〔一五九〇〕。嘉靖二十六年丁未科（一五四七）二甲八十名の進士）の『弇山堂別集』では、「知過不改（過ちを知りて改めず）」とする。

戾

親王湘王栢建文〔帝の〕初に諡さる、永樂〔帝の時に〕「獻」に改たむ。邸王後に改めて「景皇帝」と諡す、追封さる代王遜端正統〔年間に諡される〕。右〔の「戾」の諡の意味は〕俱に「知過不改（過ちを知りて改めず）」なり（『弇山堂別集』卷七十・諡法一）。

さらに、明・郭良翰（字は道憲、福建莆田の人。萬曆中に蔭官を以て太僕寺寺丞になる）の『明諡紀彙編』には、「愾愾遂過曰戾（愾愾して過ちを遂ぐを戾と曰う）」という説明も加えられる。

前過（前の過ち）を悔いざるを「戾」と曰う（不悔前過曰戾） 周ねく知りて改めず。『通考』（王圻の『續文獻通考』）に「乖戾して常に反す」と云う。

過ちを知りて改めず（知過不改曰改） 左〔参照〕

愾愾して過ちを遂ぐを戾と曰う（愾愾遂過曰戾） 周ねく諫〔言〕を去るを「愾」と曰い、是に反するを「愾」と曰う。『通考』（王圻の『續文獻通考』）に「人の言を受けず、己の非を改めず」と云う。「愾」は一に「狠」に作る（『明諡紀彙編』卷二・諡法上）。

①『逸周書』諡法解に「愾愾遂過曰刺」とあり、孔晁は「去諫曰愾、反是曰愾」と注する。

②『續文獻通考』卷之一百三十四・諡法考・「總記」に「愾狠遂過曰刺 不受人言不改己非」。

「前の過ちを悔やまない」よりも、「過失を知りながら改めない」や「諫言を聞き入れず善に反す」のほうが、景泰帝を非難するのにはより適切であるように思える。

もっとも、清・吳省蘭（字は稷堂。江蘇南匯の人。乾隆四十三年戊戌科（一七七八）二甲三名の進士）の『續通志諡略』や清・沈惠縷『諡法考』などは、「戾」字について「不悔前過曰戾」との説明を引くのみである。

では、「戾」と諡されたのはどのような人物であったのだろうか。管見の及ぶ限りでは、漢の武帝の皇太子に、「戾」と諡されたのが最初の用例である。

この皇太子は、漢の武帝の子で、元狩元年（B.C122）に皇太子に立てられる。母は衛皇后。『漢書』卷六十三・「武五子傳」によると、武帝の晩年の征和二年（B.C91）に、皇太子は、巫蠱事件を利用して皇太子を罪に陥れようとしていた江充を誅する。その時に衛兵を動かしたことが、叛乱を起こしたとされ、湖縣（河南靈寶縣）に逃れ潜伏する。そして、発見され自死する。後に武帝は、皇太子には罪がなかったことを知り、思子宮を造り、湖縣（河南靈寶縣）に「歸來望思之臺」を造る。武帝を継いだ昭帝が亡くなると、紆余曲折の末に皇太子の孫が帝位につき宣帝となる。「戾」と諡するのは、この皇太子の孫にあたる宣帝である。

『漢書』卷六十三・「武五子傳」によると、この「戾」という諡號は、「諡法」に「諡とは、行の跡なり」とあることにしたがって、選定されたという。

[戾] 太子 遺孫一人有り。史皇孫の子、王夫人の男なり。年十八にして尊位に即く。是れ孝宣帝と爲す。[宣] 帝 初めて即位し、詔を下して曰く、「……諡法に曰く『諡とは、行の跡なり』と。愚 以爲えらく[父] 親の諡は宜しく「悼皇」と曰い、母は「悼后」と曰い、諸侯の王園に比^{なら}（倣）い、奉邑三百家を置き、故皇太子の諡は「戾」と曰い、奉邑二百家を置き、史良娣は「戾夫人」と曰い、^{つかもり}守冢三十家を置き、園に長丞を置き、周衛・奉守は法の如くすべし」と（『漢書』卷六十三・「武五子傳」）。

戾太子には、孫がひとり残されていて、史皇孫の子で、王夫人の生んだ男子である。十八歳で帝位についた。これが宣帝である。宣帝は即位するとすぐに、詔を下して「武帝のもとの皇太子（宣帝の祖父）は、湖縣に葬られているが、號諡や年ごとの祭祀もない。そこで、號諡を選定し園邑を置け」と言った。それに対して有司（やくにん）が「諡法」に曰く『諡とは、行の跡なり』（『逸周書』諡法解に見える）とあります。そこで行跡を考えますに、宣帝の父の諡は「悼皇」、母は「悼后」とし、諸侯の定めのようにして奉邑三百家を置き、故皇太子の諡は「戾」として、奉邑二百家を置き、実母の史良娣は「戾夫人」として、^{つかもり}守冢三十家を置き、園に長丞を置き、警備は法の規定のようにすべきかと思ひます」と上奏した、という。

『漢書』宣皇帝紀・「孝宣皇帝、武帝曾孫、戾太子孫也」条に顔師古注に引く韋昭と臣瓚との注を見ると、つぎのようにある。

韋昭 曰く、違戾（違反する）を以て^{ほしまま}擅に兵を發す、故に諡して「戾」と曰う。臣瓚曰く、太子 江充を誅して以て讒賊を除くも、事 明かに見れず。後、武帝 覺寤し、遂に[江]充の家を族す。宣帝 以（や）むを得ず^{あらわ}（不得以）惡諡を加えるなり。董仲舒 曰く、『其の功有りて、其の意無きを之れ「戾」と謂う。其の功無くして、其の意有るを之れ「罪」と謂う（有其功無其意謂之戾、無其功有其意謂之罪）』、と。[顔] 師古 曰く、瓚の説^ぜはなり、と（『漢書』宣皇帝紀・「孝宣皇帝、武帝曾孫、戾太子孫也」条）。

①『漢書補注』宣帝紀第八・「孝宣皇帝、武帝曾孫、戾太子孫也」条の補注に「[王] 先謙曰く、「不得以」

は、猶お「不得已」がごとなり」と解釈しているのによる。

韋昭は、皇太子が違法に部隊を動かしたということから、「戾」と諡したと注釈する。臣瓚の注釈では、皇太子は、江充を肅清して讒言をする奸臣を誅殺したが、そのことは明るみにならなかった。後に武帝はそのことを悟り、江充の一族を処罰した。皇太子の孫にあたる宣帝は、「戾」という諡は悪い意味なので、なんとかしたかったが、已むをえなかった。董仲舒は「奸臣を誅する功績があつて、叛乱の意志はないものを「戾」といい、奸臣を誅する功績がなくて叛乱の意志があるものを「罪」という」という。そして、顔師古は、臣瓚の説を是であるとする。

『漢書』では、「諡とは、行の跡なり」ということから、行状を勘案して「戾」と諡したというのみである。韋昭の注釈は、それに沿って「違法に部隊を動かした」からだ考える。

臣瓚の注釈では、宣帝は「戾」がマイナスのイメージを持った諡であるのでなんとかしたかったが、どうしてもできなかったという。ただ臣瓚は、皇太子の行為は悪人を誅殺したものであったといい、董仲舒の「戾」についての解釈も紹介して、できるだけ「戾」のマイナスのイメージを払拭しようとしている。なお、董仲舒の解釈は、ここに引用されるだけの佚文である。

ちなみに、顔師古「前漢書敘例」によると、韋昭⁹⁾は、

韋昭 字は弘嗣、吳郡雲陽（江蘇鎮江府丹陽縣）の人。〔三國〕吳朝の尚書郎・太史令・中書令・博士祭酒・中書僕射などを経て、高陵亭侯に封ぜらる（顔師古「前漢書敘例」による）。

とある。臣瓚については、よく分からないという。

郡縣を詳らかにせず（顔師古「前漢書敘例」：王先謙『漢書補注』に考証が行われているが、やはり断定できないようである）。

ただし、顔師古注に引用されているので、おおまかに魏晉南北朝の人であったといえる。すると、「戾」字は魏晉南北朝から、芳しくない意味で用いられていたといえる。

また、『漢書』によれば、理由が記されていないが、戾王駿と安定戾侯賢と博望侯許黨¹⁰⁾が、「戾」と諡されている。

さらに、衛太子（戾太子）の子の進（史皇孫と称される：宣帝の父）の夫人の王夫人（宣帝の）の兄弟の王武の子の王商も「戾侯」と諡される。王商（字は子威）は丞相となるが、元帝の皇后王氏の外戚の王鳳（王莽の伯父）に怨まれ、最終的には丞相を免ぜられて三日後に亡く

9) 『三國志』卷六十五・吳書二十・韋曜傳の裴松之の注によれば、「韋曜」の本名は「韋昭」であるが、晉の太祖文皇帝司馬昭の「昭」字を避諱したため、『三國志』では「韋曜」と記される、という。

韋曜 字は弘嗣、吳郡雲陽の人なり也。〔裴松之注〕：〔韋〕曜 本名は昭なり。史 晉の諱の爲^{ため}に之を改たむ（『三國志』卷六十五・吳書二十・韋曜傳・「韋曜字弘嗣，吳郡雲陽人也」条の裴松之注）。

ただし、錢大昕は『二十二史考異』（卷十七・「韋曜傳」条）でその意見を駁し、葉廷琯（字は紫陰，号は調生・愛棠・召生・蛻翁・蛻廬病隱・十如老人。蘇州吳縣の人。乾隆五十七年〔一七九二〕～同治八年〔一八六九〕）は『吹網錄』（卷一・「韋昭避諱改名」条）で錢大昕の考えを批判し、裴松之の説明に賛同する。

なる（『漢書』卷八十二・王商史丹傳喜傳第五十二による）。

顔師古は、これらの「戾」字について、何も注釈をつけていない。

北魏では、太宗明元皇帝の子の樂平王丕が「戾王」と諡されている。『魏書』・『北史』によると、樂平王丕は、華北を統一した世祖太武皇帝の異母兄弟にあたる。北魏の世祖太武帝の時の実力者であった劉潔の失脚に連座して、鬱々として太平眞君五年（四四四）二月に薨ずる（『魏書』卷十七・明元六王列傳第五・「樂平王」／『北史』卷十六・列傳第四・明元六王・「樂平王丕」による）。

明朝になると、湘王柏に「戾」と諡し、郡王遜端に「悼戾」と諡されている。郡王遜端が「悼戾」とされた経緯については、いまのところよくわからない。

湘王柏は、太祖洪武帝の第十一子（『明史』列傳・諸王二・「湘王柏」は第十二子とする）になる。建文帝が即位した直後の諸王府の取り潰しと関係して湘王柏は焚死する。その理由として、今のところ何に基づいたかは明らかにできないが、『建文朝野彙編』所引の『南京貼黃冊』や陳建の『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』は、つぎのように伝える。

〔洪武三十二年／建文元年〕湘王柏 自殺す。是れより先、湘王 寶鈔（紙幣）を偽造し、殘虐に人を殺すに及ぶ。帝（建文帝） 敕を降し切責し、兵を發して之を討たんことを議す。〔湘〕王 怒り、其の宮室・美人を焚く。已にして、馬に乗り弓を執りて、火中に躍り入りて死す（『建文朝野彙編』卷二・二十一葉～二十二葉・所引『南京貼黃冊』／『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之一・「己卯 洪武三十二年 即建文元年」条）。

建文元年（洪武三十二年：一三九九年）、湘王柏が自殺した。これより前、湘王柏は紙幣を偽造し、殘虐に人々を殺した。建文帝は敕書を下して厳しく責め、軍隊を派遣して討伐することを提案させた。湘王柏は、怒って、宮殿や妃嬪を焚いた。そして、乗馬して弓を持って、火の中に飛び込み亡くなった、という。

こうして、建文朝は、湘王柏に「戾」と諡する（『大明太宗體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝實錄』卷之十・「洪武三十五年秋七月丙戌（五日）」条による）。

- ✓ 10) 戾王駿は、『漢書』景十三王傳によると、景帝の末子の憲王舜の末裔になる。前漢の景帝の末子の憲王舜が亡くなり、子の勃が立つが不行跡のため、数か月で、国は取り潰しになる。しかし、帝は哀れに思い、憲王舜の子の平を眞定王とし、商を泗水王とする。これを子の哀王安生が継ぎ、つづいて哀王安生の弟の戴王賀、その子の勤王煖が立つ。それを継いだのが戾王駿である。戾王駿は三十一年で亡くなり、子の靖が継ぐが、王莽の時に断絶する。『漢書』景十三王傳には、なぜ「戾」と諡されたのかは記されない。

安定戾侯賢は、武帝の子の燕王旦の子になる。『漢書』卷六十三・武五子傳第三十三には「安定侯」にするのみ記されるが、『漢書』卷十五下・王子侯表第三下に、「安定戾侯賢」とある。

宣帝の皇后の兄の博望侯許舜の孫の許黨については、『漢書』卷十八・外戚恩澤侯表第六に、

博望侯許舜、昌邑の人。孝宣〔皇〕后の兄。神爵二年、「頃」と諡さる。〔許〕舜の子の〔許〕敞、甘露三年に「康」と諡さる。〔許〕敞の子の〔許〕黨、河平四年に「戾」と諡さる……甘露三年、戾侯〔許〕黨 嗣ぐ、〔甘露〕二十六年 薨ず（『漢書』卷十八・外戚恩澤侯表第六）

とある。

その後、建文帝から帝位を篡奪した永樂帝は、即位するとすぐの洪武三十五年七月五日に、湘獻王柏の「戾」の諡を「獻」に改める。『實錄』は、つぎのようにいう。

〔洪武三十五年七月〕丙戌（五日）、改めて故の湘王に諡して「獻」と曰い、妃呉氏〔に諡して〕「獻妃」と曰う。官を遣りて諡冊及び寶を齎り、荊州の墳園を祭る。〔湘〕王 諱は栢、太祖高皇帝の第十一子なり。母は、順妃胡氏、豫章侯胡美の女なり。〔湘〕王 明敏にして學を好み、博聞強識、文章を攻めて尤（すぐれる）なり。道家の言を好みて、自から「紫虛子」と稱す。建文中、其の府中の陰事（隠し事）を告（告発）する者有り。〔湘〕王 懼れ、〔王〕宮を闔て自焚す。〔湘〕王 年二十有八なり。妃は、江陰侯吳高の女なり。當時、〔湘〕王に諡して「戾」と曰う。是に至り上（永樂帝）其の辜に非ざるを憫み、詔して今の諡に改め、親から碑を墓に製る、云いう（『大明太宗體天弘道高明廣運聖武神功純仁至孝文皇帝實錄』卷之十・「洪武三十五年秋七月丙戌（五日）」条：『明史』卷一百十七・列傳第五・諸王二・「湘王栢」は、この説明にしたがって撰述されている）。

洪武三十五年（一四〇二）七月五日、改めて湘王栢に「獻」と諡し、妃の呉氏に「獻妃」と諡した。そして、役人を派遣し、諡冊と寶物を捧げて持たせて、領地であった荊州の墳園を祭らせた。湘王、名は栢で、太祖洪武帝の第十一子になる。母は、順妃胡氏で、豫章侯の胡美の息女である。湘王栢は、明敏で学問好きであり、博聞強識で、文章も上手であった。道家の言説を好み、みずから「紫虛子」と稱した。建文年間に、湘王栢の封国の隠し事を告発する者がいた。湘王栢は、おそれて、王宮を閉じて自焚した。湘王栢は、二十八歳であった。妃は、江陰侯吳高の息女であった。湘王栢が亡くなった当時、「戾」と諡された。いまここに至って、上（永樂帝）は、湘王栢が無実であったことを憐れみ、詔をだして、「獻」字¹¹⁾に改め、みずから墓碑を作成したという。

このように、「戾」と諡された前漢武帝の戾太子・北魏の樂平王丕・明の湘王栢などは、やはり否定的に評価される人たちであった。すると、郕王（景泰帝）によくない意味を持つ「戾」字を諡として贈ったということは、帝位を取り上げられ、宮中に幽閉された英宗の気持ちがこめられていると言えるのではないだろうか。

おわりに

復辟の詔や皇太后の制に見える、あからさまな郕王（景泰帝）批判からすると、郕王（景泰帝）の病に乗じて復辟した英宗は、郕王（景泰帝）に対して好い感情は抱いていなかったようである。北京に帰還してからの自分への処遇に憤りを感じ、英宗が郕王（景泰帝）に「戾」と諡したことは、容易に理解できる。

しかし、これでは天子としてあまりにも度量がないと思われてしまう。そのため、英宗「實錄」では、英宗の治世・行跡を総括する時に、つぎのようにのべている。

11) 「獻」字については、『史記』正義に引く「諡法解」では、

聰明叡哲なるを獻と曰う（聰明叡哲曰獻） 孔晃注：通知の聰有り

知^{うまれつき}質にして聖有るを獻と曰う（知質有聖曰獻） 孔晃注：通ずる所有りて蔽うこと無し

とある。

『逸周書』諡法解では、

聰明叡哲なるを獻と曰う（聰明叡哲曰獻） 通知の聰有り（有通知之聰）

とあるのみである。

陳逢衡は、『逸周書補注』で、次のような補注をつけている。

聰明叡哲なるを獻と曰う（聰明叡哲曰獻）。『後漢書』孝獻皇帝〔紀〕注に同じ〔説明〕を引く。『爾雅』釋言（「獻、聖也」条）の郭〔璞〕注〔の「諡法曰、聰明睿智曰獻」〕は「叡哲」もて「睿智」に作る。『獨斷』同じ。『後漢書』桓帝懿獻梁皇后（列傳・皇后紀第十下・「桓帝懿獻梁皇后諱女瑩」条）の注に〔諡法曰、「溫和聖善曰懿、聰明叡知曰獻」と〕引きて「哲」を「智」に作る。

孔〔晃〕注：通知の聰有るなり。

補注：魯の獻公具「獻」と諡す。『漢書』景十三王傳に、「河間王德立、二十六年にして薨ず。中尉の常麗以て聞するに、曰く、王は身端く、行ないは治まり、溫仁恭儉にして、篤く敬い下を愛し、明知にして深く察し、鰥寡を恵す、と。大行今（令）「諡法に曰く「聰明叡哲なるを獻と曰う（聰明叡哲曰獻）」と。宜しく諡して「獻王」と曰うべし」と奏す」と。〔顔〕師古曰く、獻は深なり、通なり、と（『逸周書補注』卷十四・十五葉・「聰明叡哲曰獻」条）。

また、朱右曾の『逸周書集訓校釋』六・諡法第五十四・「聰明叡哲曰獻・知質有聖曰獻」条では、『史記』正義に引く「諡法解」によって、「知質有聖曰獻」条を補っている。

「聰明叡哲」とは、視・聽・思の徳を具う。孔〔晃〕曰く、「知質有聖」は「通ずる所有りて蔽うこと無き」なり、と。「知質」句は、舊と脱す。「史記正義」に據りて補う（『逸周書集訓校釋』六・諡法第五十四・「聰明叡哲曰獻・知質有聖曰獻」条）。

さらに、潘振（字は芑田、号は餘莊。浙江仁和人）の『周書解義』（嘉慶十年（一八〇五）序）では、

「聰」は、聞かざる無し。「明」は、見ざる無し。微に通ずるを「叡」と爲す。先知なるを「哲」と爲す。

「獻」は、聖なり（『周書解義』卷六・諡法・「聰明叡哲曰獻」条・五十四葉）。

と注する。

こうした注釈からすると、「聰明叡哲曰獻」・「知質有聖曰獻」は、「聡明で明晰」・「知性が生まれつきで、すべてを理解している」などの意味があるとする。

蘇洵の「諡法」では、つぎのようにいう。

獻二

聰明睿智なるを獻と曰う（聰明睿智曰獻）

獻は賢なり。

徳に嚮いて徳を内とするを獻と曰う（嚮徳内徳曰獻）

今文尚書に云爾。注家 皆云う、嚮とは恵なり、徳とは元なり、と。其の義 當に通ずべからず。『書』を以て信と爲す。劉熙 以て「獻とは軒軒然として物の上に在るの稱なり」と爲す。内は亦た嚮なり。人 能く日々徳に嚮う。恵は則ち衆の推仰する所と爲り。軒軒然として物の上に在り（『諡法』卷一・「獻二」条）。

蘇洵は、「獻」字には、「聡明で明晰」である、「日々徳に向きあい徳を会得する」などの意味があるという。

『通志』諡略で「獻」字は「上諡法」の百三十一字の一字に分類され、

右、百三十一の諡は、之を君親に用う・之を君子に用う（『通志』卷四十六・諡略第一・諡中）。

とされる。君主や君子に用いる文字であると考えている。

用例としては、遺漏があると思われるが、以下のような人たちがいる。

春秋・戦国期では、

魯獻公・齊獻公・衛獻公・晉獻公・秦獻公・鄭獻公・燕獻公・趙獻侯・晉獻侯などがある。

・・・・其の〔都に返還されて宮中の〕南宮に歸するに及ぶに、閱歴（経過）すること七稔（年）なり。萬幾（政務）を脱屣（草履を簡単に脱ぎ捨てるように執着しない）して優游（悠々）自樂す。豈に復た重ねて尊位に履く^②の心有らんや。天順に正に返るは、盖し上天の眷顧（加護）の自から然るなり。亦た臣民億兆（多く）の謀^{はか}らずして同じく然りとするの心なり^①、彼の天の功を貪^②る者は、上（英宗）固より之を洞燭（明察）す。是^こを以て終に其の欺冒（欺いて名をかたる）を容れず。〔上（英宗）は〕日月の無私に〔すべてを〕照照するの者のようなれば、情 克く隠す罔し。雷霆は無私に〔すべてを〕斷斷（断ち切る）たるの者のようなれば、慝（悪事） 逃るる所罔し。何ぞ其れ聖ならんや。古の聖人 喜怒は天理を以てし己を以てせざる者なり。〔上（英宗）の〕政 茲^{かく}の若し。是を以て「景泰」の紀年 上（英宗）は革めざるや、大統歴 之を載す。景泰の政事 上（英宗）は改めざるや、百司（百官）・庶府^③ 因りて之を行なう。此れ以て上（英宗）の同氣^{ゆう}に友なるの心を見す可きを觀る・・・・（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之三百六十一・卷末）。

①『孟子』告子上に「心之所同然者何也。謂理也，義也（心の同じく然りとする所の者は何ぞや。謂わく理なり，義なり）」。

②『左傳』僖公二十四年に「竊人之財，猶謂之盜，況貪天之功以爲己力乎（人の財を竊^{ぬす}むを，猶お之を盜と謂う，況んや天の功を貪り以て己の力と爲すをや）」。

③『書經』立政に「虎賁，綴衣，趣馬，小尹，左右攜僕，百司庶府」とあり，蔡沈の『書集傳』は「百司は，司裘・司服^{ふく}の若し。庶府は，内府・太府の屬^{ふく}の若し」と注する。

都に戻って宮中の南宮に落ち着かれてから，七年が経過した。政務については，草履を簡単に脱ぎ捨てるように執着なさらず，悠々と過ごされていた。だから，どうしてふたたび皇位に復帰されるようなお心があったであろうか。しかし，天順元年に復辟されることになったのは，上天のご加護の自然にそのようになったことであり，臣民の多くのはからずもよしとする気持ちからであった。人の手柄を横取りしようとする者は，上（英宗）はもとよりご明察なさっていた。そういうわけで，この欺いて名をかたろうとする者たちをお認めにならなかった。上（英宗）は，日月が無私にすべてを照すようになさっていたので，心情は隠し通すことはできなかったし，雷霆が無私にすべてを斷斷（断ち切る）とするようになさっていたので，悪事は逃れる

さらに，後漢の最後の皇帝であった獻皇帝・南燕（鮮卑）の獻武皇帝・北魏の獻明帝や獻文皇帝などがいる。

明朝では，湘王柏以外に，太祖洪武帝の第十子（『明史』列傳・諸王二・「蜀王椿」は第十一子とする）の蜀王椿（永樂二十一年に贈られる）・仁宗洪熙帝の第四子の肅王瞻埈（永樂十九年に薨じ，永樂二十二年に諡を「獻」に改める）・太祖洪武帝の第十六子（『明史』列傳・諸王二・「寧王權」は第十七子とする）の寧王權（正統十三年に贈られる）と，憲宗の第四子の興王（子供の世宗嘉靖帝が傍系から入って皇帝となったため，親王であったが睿宗獻皇帝の廟号・諡号を贈られる）などがある。

ことはできなかった。ほんとうに聖なる明察ではないだろうか。古の聖人は、喜怒は天理を基準とし、自分の感情によることはなかった。上（英宗）の政治もそのようなものであった。そういうことから、「景泰」の年号は変更ならず、そのまま大統歴に記載された。郕王（景泰帝）の政策も改めるようなことはなさらなかったので、役人たちはそのまま政務を執り行えた。ここから、上（英宗）が兄弟の情に厚いということを示していることが理解できる、という。

兄弟の情に厚かったから、郕王（景泰帝）が帝位にあった時の「景泰」の年号は、そのままにし、政策も改めることはなかった、というのである。もちろん、「戾」と諡したことなどは言及されない。

ところが英宗の後、即位した憲宗成化帝になると、帝位にあった景泰帝の諡號について改めて考え直さなければならなくなる。父の英宗の場合、景泰帝に「戾」と諡する理由は理解できる。憲宗成化帝についても、一度は皇太子の地位を追われたのであるから、「戾」のままでよかったかもしれない。ところが、それでは、天子の理想像からは外れてしまう。やはり、天子のあるべき姿としては、寛容の態度を持っていると思われなければいけない。また、仮にも帝位についていた人物に対する諡にしては、ひどすぎる。そのため、次稿で検討するが、憲宗成化帝が即位すると、臣下からしきりに「戾」字の再考について提案がなされ、諡号を「景」字に変更する。この「景」字は、一見するとなかなかすばらしい文字のように見えるが、実は意味深長な文字であった。

憲宗成化帝の「景」字変更については、次稿で検討したい。

On Ming Emperor Jingtai's Posthumous Names

Kunio TAKINO

Abstract

This paper investigates the matter of Ming Emperor Jingtai's posthumous name being changed three times. The result of the investigation shows that each of the various posthumous names reflects the feelings that each of the emperors who bestowed the posthumous names had towards Emperor Jingtai.